



SESERAGI—MISHIMA ROTARY CLUB WEEKLY REPORT

クラブ
週報

2019～2020年度 RI会長 マーク・ダニエル・マローニー
RIテーマ ロータリーは世界をつなぐ

クラブテーマ「私たちは風土を大切に守り発展を続けていきます」

会長 山田定男

副会長 加藤正幸 幹事 石井和郎

第1427回例会 2019.10.4(金)曇

司会:藤川智徳君 指揮:田村康晃君
ローターソンク「奉仕の理想」

事務所 三島市中央町4-9 小野住環中央町ビル2F
TEL.055-976-6351 FAX.055-976-6352

<http://www.seseragi-mishima-rc.gr.jp>

せせらぎ三島ロータークラブ

検索

例会場 呉竹

TEL.055-975-3210
毎週金曜日 第1・第3 夜間例会

会長挨拶

会長 山田定男君

皆様、ロータリー活動にご尽力いただきましてありがとうございます。

米山梅吉記念館50周年事業は盛大に行われました。今後の予定ですが、10月12日はポリオの募金活動を行います。又、11月3日・4日に地区大会が浜松で行われます。12月はクリスマス例会、1月10日には4クラブ合同新年会、と行事が続きます。皆様ご多忙の折、負担をおかけします。ご協力よろしく申し上げます。

尚、地区大会に関しましては、出席義務の委員長様及び新会員の中で今までに当会に出席の経験がない方に出席をお願いします。

又、合同新年会は私たちせせらぎ三島ロータリークラブが担当となっておりますのでご承知おきください。

おめでとう

会員誕生日 9月5日 篠木喜世君
9月9日 服部光弥君
入会記念日 10月3日 鈴木真知子君



出席報告

	出席総数	出席率	会員総数	
今回	24/35	68.57%	35名	

欠席者 あなたが見えなくて残念でした。

伊丹君、遠藤君、杉山(順)君、田中君、土屋君、中村君、中本君、原君、宮澤君、山本君、渡邊君
(*出席免除会員の欠席者 澤田君)

ようこそせせらぎ三島
ロータリークラブへ

小笠原秀明さん(鈴木真知子君のゲスト)



幹事報告

幹事 石井和郎君

- ①天皇即位パレードの参加要請は三島・三島西RCと足並を揃え、クラブとしては不参加とします。
- ②本日例会終了後、理事・役員会を行いますのでよろしく申し上げます。

小笠原秀明さん

伊藤整さんという小説家の詩「弟の日」というのがあります。
 「弟が死んでから一年目の日 さらきらと夕焼けがしいい 晩になつた。姉はものを言うようになった 甥をつれて来て皆でおとむらいのようなご馳走を食べた。
 小さな甥は家中走って賑やかした。
 炉を囲んでの物語がはずんだ。
 末の弟はとうとう姉を言い負かし 姉は笑わぬようにして耳をすませ 父は聞いた 見た して幸福だった。
 もうこのままで結構だった。
 これ以上何も起きてはならなかった。
 家の横を昔からの小川が涼々(そうそう)と流れ ときどき帰りの遅い荷馬車が橋を過ぎてゆく音がした。」
 弟が亡くなって一周忌に家族が集まった様子の子の詩ですね。
 ご馳走を食べ子供が走り回り、話がはずみ賑やかな一家団欒になりました。まるで神様からの贈物のように幸福な時間が訪れました。伊藤整さんは「父は聞いた 見た して幸福だった。もうこのままで結構だった。」と書き、この幸せの永遠を願います。
 しかし続けてこれ以上何も起きてはならなかった。と書きます。家の外では、小川が流れ荷馬車が橋を渡って行きます。時は刻々と過ぎ去り、この幸福が今この一瞬であることが意識されています。
 悲しいことですが、弟の死によって、無常を強く意識するからこそ、もう二度と訪れることがないこの時だからこそ、本当の幸福を感じることが出来たのだと思います。
 お釈迦様の教えに「四馬(しめ)のたとえ」という話があります。
 一番目の馬は、御者が鞭を振り上げるとその鞭の影を見て、天にも昇る勢いで走り出します。鞭の影を見て走るので「鞭影(べんえい)の馬」といいます。
 二番目の馬は、鞭がたてがみに当たったのに気づいて素晴らしい勢いで走り出します。鞭が毛に触れて走るので「触毛(そくもう)の馬」といいます。
 三番目の馬は、鞭がビシリとお尻の皮膚に当たって走り出します。皮膚に当たった痛みで走るので「触皮(そくひ)の馬」といいます。
 四番目の馬は、鞭の痛みが皮膚を通し、肉を刺し、骨に達し骨の髄に至って走り出します。この馬を「皮肉(ひにく)骨髄(こつずい)の馬」といいます。
 お釈迦様はこの四種類の馬で、世の「無常」に気づき、本当の生き方を求める人間に例えました。
 一つ目の「鞭影の馬」というのは、よその村の知り合いの方が亡くなったと聞いて、世の「はかなさ」を思い、自分にも「無常の影」がさしていることを感じて、日々大切に生きていこうと思う人です。
 二番目の「触毛の馬」は、自分の村のよく知っているの方が亡くなったことを聞いて、世の無常を悟り、自分にも「無常の風」が吹いていることを感じて、日々大切に生きていこうと思う人です。
 三番目の「触皮の馬」は、自分の親戚や親兄弟の不幸を目の当たりにして、つくづく無常を実感し、自分も同じように「無常の風」に当たっていることを悟って、日々大切に生きていこうと思う人です。
 四番目の「皮肉骨髄の馬」は、自分自身が死に至るような病を患って、驚き慌てて自分こそ今まさに「無常の風」に吹きさらされていることを知り、日々大切に生きていこうと思う人です。
 お釈迦様は、一瞬もとどまることなく生滅変化している世の無常を、「心を目にして、心を耳にして、心を体にして」気づきなさいと言います。
 伊藤整さんの「弟の日」という詩は、弟の死によってもたらされた無常の気づきと気づいた後の無常の眼によって、この何でもない家族団欒が実は、まるできれいな水を掬い取った手に、一瞬月が皎皎と映るよう、かけがえのない奇跡のような幸福であることを教えてくれます。

批評の神様と言われた小林秀雄は、応仁の乱から戦国乱世の時代について「あの健全な時代」と言いました。「室町時代という、現世の無常と信仰の永遠とを聊い ささかも疑わなかったあの健全な時代」。

世の中が、麻の糸のように乱れ、戦いが果てしなく続き、飢饉や疫病や天災で人々が苦しんでいる戦国乱世の世を、「健全な時代」と言うのは何故でしょう。

それはお釈迦様の「四馬」の例えのように、人々が無常を腹の底から感じていた時代だから、健全な時代と呼んだのだと思います。

この戦国乱世の時代に、日本が世界に誇る独自の文化である、能や茶道や華道、そして日本庭園や建築などの芸術文化が花開き、「わび、さび」という日本人の美意識が確立しました。

これは決して偶然ではありません。

戦国乱世だからこそ、春には桜の花に、夏はホトギスの声に、秋は月に、冬はじんしんと積る雪に、いっそう無常を強く意識しました。無常の中で、侘(わび)しければ侘(わび)しいままに、寂(さび)しければ寂(さび)しいままに、一期一会をお茶に求め、永遠を花に感じ、月を愛でるために庭を造りました。

曹洞宗の開祖の道元禅師は、「切(せつ)に思うことは必ず遂(と)ぐるなり」と述べました。

そして「志(こころざし)の到(いた)らざることは無常を思(おも)わざるに依(よ)るなり」と示されました。

心から念(ねん)ずれば何事も成(な)じ遂(と)げられる。それが叶(かな)わないのは無常を思(おも)わないからだと言うのです。

日々の生活に無常を思うことは、一刻一刻をかけがえのない時にします。人との関係は、唯一無二の出会いになります。仕事においては、今この時に集中することになります。

本当の幸福を得るために、良い仕事をするために、良い人間関係を築くために、美しく生きるために、無常を我が宝(たから)にしていかなければならないと思います。

お釈迦様の教えの無常、「諸行無常」の歌を紹介します。スコットランド民謡の「故郷の空」のメロディで歌います。

「今朝目が覚めてありがたし 昨日はすでに過ぎ去りぬ

明日は知らじな今日の日を 尊く生きて励まなん」

朝起きてこの歌を歌えば、ご利益(えき)限り(かぎり)ないものと思います。

ご清聴(せいちょう)有難(ありがた)うございました。



スマイルボックス

小島 真君: 半年間にわたり、長期に休んでしまい大変申し訳ありませんでした。やっと後任スタッフも入り、富士宮通いもなくなりました。これからは真面目にロータリー活動を頑張ろうと思っております。今後ともどうぞよろしく願い致します。

鈴木真知子君: 本日の卓話、鈴木真知子ですが、ゲストを紹介。「葦山高校時代の同窓生で現在も伊豆長岡に代々続く湯谷山長温寺住職 小笠原秀明様をお願い致します。よろしく願い申し上げます。スマイル致します。

大村典央君: 家族会参加できずすいませんでした。久しぶりに例会出席するのでスマイルします。

Aテーブル: 先週の金曜日にAテーブルのテーブル会を行いました。会長の世界を見据えたロータリー論がよく解りませんでした。皆様ご苦勞様でした。